

儂い音(4)

翌日の朝、真琴は布団から起き上がると窓に目を向けた。日の光が入り込んでいた。休みの日は父親の手伝いで日の出前に起こされていた為、部屋で既に日が出ているのを見るのは珍しかった。

玄関から電話のベルが鳴り響いた。

真琴は寝ぼけた状態から意識を取り戻すと同時に、玄関に向かった。家族は皆家を出ていた。

玄関に出た。端にある電話台の上で、FAXと一体になった固定電話が鳴っていた。

真琴は電話を取った。「もしもし」

『もしもし、山下君』照美の声が受話器から聞こえた。『漁に行っていないの』

真琴は嫌そうな表情をした。「干された」

受話器から笑い声が聞こえてきた。『昨日の続きで皆集まろうと思うんだけどさ、どうかなって』

「また」真琴は呆れた。勉強以外に変な話を吹き込むに決まっている。

『まだ終わっていないんだから、しょうがないでしょ』照美の怒り気味の声が響いた。

「分かった分かった、何時にやるの」真琴は曖昧に行った。目が冷めたとはいえ、完全に意識を戻していない。頭の中にかかるモヤを一刹那早く払い除けたかった。

『屋には終わるから午前10時くらいかな。明日から合唱の練習があって井崎姉が家に戻ってくるでしょ。だから最後にするわ』

「もうやらないって意味」

『良い場所があれば皆で集まれるんだけどね』

「場所か」

『いい所あったら紹介してよ。で、来るの』

「出かける理由が出来るなら何でも良いよ。肩身が狭くて仕方ないんだ」

『分かったわ、待ってるからね』軽快な声が響いて電話が切れた。

真琴は受話器を下ろし、自分の部屋に向かった。布団を畳んで着替え、荷物をまとめると家を出た。鍵はかけなかった。

母親の姿は庭になかった。栽培している花を出荷していたからだ。真琴は母親の不在を気に留めず、バス停に向かってバスを待った。真琴以外誰もいなかった。時刻表に目をやったが、時計を持っていなかったので時間が分からず太陽を見た。日は完全に登りきっていないかった。道路は車が1台も通っていないかった。

暫く待つとバスが来た。行き先を見ずに乗った。進行方向から照美のいる住宅街に行くのは分かっていた。

バスの中は人が少なく、窓から海沿いの景色が見えた。学校に行く途中の景色しか見ていない真琴にとって、斬新に見えた。

住宅街に入った。真琴は降車ブザーを押した。バスは道路脇にあるバス停に止まった。

真琴は運転席側にある降車口に行った。運転席の隣にある料金箱に小銭を入れて降りた。

バスは走り去った。住宅街を歩き、照美の家の前に来た。昨日と同じくインターホンを押した。母親が出てきて歓迎した。玄関を上がり階段を昇って照美の部屋に来た。一連の行動は昨日と同じだったが、同じである分照美の部屋のドアを開けてもいいと判断できた。ドアを開けると照美と生徒達がいた。中央に座卓が2つ置いてあり、上に教科書やノートが散らばっていた。

「山下君、来たわね」照美は笑みを浮かべた。

照美の部屋にいる生徒達は、昨日より少なくなっていたが、2、3人抜けた程度で10人くらいはいた。皆、理解ある親から許しをもらったか、朝に手伝いを終えて来ていた。机には白いCDが10枚程積んであった。

照美は壁にかけてある時計に目をやった。10時20分を示していた。

「遅れてすみません」真琴は照美に謝った。

「気にしないでよ。バスがあんまり来ないのが悪いんだし、急に頼んだあたしもあたしよ」照美は笑いながら言った。

昨日の照美とは印象が異なり表情が柔らかかった。「適当な場所に座っていいわよ」

真琴は中に入り、座卓の空いている箇所へ腰掛けた。

「よろしく」隣にいる生徒が声をかけてきた。

真琴は軽く頭を下げた。「よろしく」

真琴は鞆を隣に置き、筆記用具と教科書やノートを座卓に置いて宿題の消化を初めた。

生徒達の勉強の輪に入った。時に見せ合い、時に行き詰まった問への解を教えていた。一人で言うより効率よく、宿題の消化が進んでいった。

生徒達が持ち込んだ宿題が粗方埋まった。生徒達もだいたい気が緩み、互いが互いに話をしあっていた。全ての人々が打ち解けていた。

「昨日の続きなんだけどさ」照美は声を上げ、机から椅子を引いて腰掛けた。

生徒達は一斉に照美を見た。机の上に置いてあるCDを手を持っていた。

「転入生の話だけど、先生に話した方がいいと思うのよ」

生徒達は皆、照美の話に渋い表情をした。平川がソコを担当するのは決定しているので、話をしないまま過ごせば何もなくなる。話をすれば問題がこじれ、合唱どころではなくなる。生徒達は面倒の種をばらまくのを嫌がっていた。

「映像の彼女が平川さんだと言いつけられない」真琴は昨日頭の中で浮かんだ内容を話した。

照美は真琴の言葉に驚き、次に睨みつけた。皆が明らかに平川だと言っていたにも関わらず、否定するのは鼻根している以外に感じなかった。

真琴は照美の視線に恐怖を覚えた。「事実なのかも知れないけど、本番まで一ヶ月もないんだ。面倒を起こせば最悪、成功や失敗以前に出られなくなる」

「風紀の問題よ」照美は言い切った。「合唱で一生懸命歌っている子が中年オヤジと遊び回ってるビデオに出てるって話、村全体ばかりか県や全国に知れ渡ればどうなると思ってるの。一生合唱コンクールに出られなくなるわ。だから外れてもらうのよ」

「昨日の内容を皆に話すのか」

「当然でしょ、事情を隠せば返って知ろうとするわ。なら全部話して終わりにした方がいいに決まってるじゃない」

生徒達は照美の話に唖った。今になって隠し通せというのは無理があるが、合唱の間だけ外れるというのは対処療法でしかない。根本的な問題である『平川が如何わしいビデオに出ているらしい』という問題が解決していないからだ。根本の解決を見ない限り卒業するまで所か、一生張り付くスティグマになる。やる側は良い発奮出来るが、受ける側としてはたまったものではない。

「第一、自分でビデオに出たのに問題があるんじゃない。自分でやらかしたのが返ってきただけよ」照美は平然と言
い放った。

「本人じゃないかも知れないのに」生徒の一人が照美に反論した。映像では名前すら語っていない以上、本人である
という証拠はない。

照美はCDを差し出した。「疑り深い人のために、証拠確認をさせようってダビングしといたわ。受け取って擦り切れ
るまで確認しなさい」

照美は真琴の元に向かい、CDを差し出した。最も疑り深く、平川をエコヒキしていると判断していた。

真琴は照美が差し出したCDのケースを見つめた。窓からの光を反射して輝く板の中に入っている円盤に何が入っ
ているのか、全てを察していた。

「受け取りなさい」照美は真琴に圧力をかけた。

真琴は生徒達に目をやった。皆が皆、黙って真琴を見ていた。受け取らなければ自分達に回ってくる。受け取りたく
ないから受け取れと無言の圧力がかかっていた。

「分かったよ」真琴はやむなくCDを受け取った。真琴にとって幸いなのは、自分の家には再生するパソコンが一切な
かったという点だった。持っいても見られないのだから只の円盤以上の意味はない。

「じゃあ、他の人も確認して、報告しててね」照美は生徒達の元に向かい、1枚1枚を渡した。生徒達は照美の押し
切る能力に屈し、黙って受け取った。

照美は壁掛けの時計に目をやった。12時近くを示していた。「もう時間ね。これで終わりにしましょ」

真琴は照美の言葉を聞き、素早く荷物を片付けた。他の生徒達も同様に片付けた。

「今日で終わりだね」

「まだ残ってるんでしょ。場所があれば続けられるんだけど、うちは先生がいるから現状無理よ」

「うん、今日は世話になったよ」真琴は適当に相槌を打った。

照美は真琴の手元にCDがあるのを認めた。意図的なのか否か、入れ忘れていた。

照美は真琴の元に向かい、CDを取って差し出した。「忘れてるわよ」

真琴は仕方なく受け取り、上着の中に突っ込んだ。鞆は既に閉めていた為、また開けるのが面倒だった。CDは上
着のポケットからはみ出していた。

「月曜に学校で」真琴は荷物を持って立ち上がり、階段を降りた。

玄関に向かう途中で照美の母親に会った。「お邪魔しました」照美の母親に頭を下げた。

照美の母親は、真琴に合わせて頭を下げた。

真琴は玄関に向かい、照美の家を出ていった。

細い路地を歩いていくと、バス停のある開けた通りに出た。ビルや店が並ぶ都会の光景はなく、道路の幅が広いだ
けで建物は今まで通ってきた道にあったのと変わりなかった。車は1分で1台2台通るかどうかの状態で、信号機が
いない車の為に無意味な仕事をしている。

真琴がバス停に向かって歩いていくと、軽トラックが走ってきた。大葉の車だった。真琴がいる位置の隣に止まった。

真琴は立ち止まった。

車の窓が開き、大葉が顔をのぞかせた。「よお、夏休みで買い物か。上町にでも行かないのか」

「いえ、友人の家からの帰りです」

「へえ、漁の手伝いもせずにか」

真琴は黙った。

大葉は笑みを浮かべた。「悪い、余計な質問しちゃったな」

「大葉さんこそ、何で住宅街にいるんですか」

「現場を回り終わって昼飯食いにな。住宅街以外に定食屋なんて村にねえからな。近場一帯はCORP頼みだろ」

「港に行けば飲み屋はあります」

「村の連中が集まる所は好きじゃねえんだ。住宅街って昼は皆出払っていないから、一人を堪能できるんだ」

「では午後に仕事があるんですか」

「いや、当面暇だ。仕事がない以上は動けねえ」

「仕事なくて大丈夫なんですか」

「外に比べて食べ物と水道代が安いからな、当面影響はねえ」大葉は笑みを浮かべた。「帰りなんだろ、一緒に乗る
か」

「またですか」

大葉は呆れた。「疑り深いやつだな。人の好意は素直に受け取っとけ」

真琴は仕方なくドアを開け、大葉の車の助手席に乗った。

「近くで良いか」

「ええ、降りたら歩いていきます」

大葉はアクセルを踏んだ。車は加速し、住宅街まで一直線に向かった。

「港の手伝いは干されたか」大葉は真琴に話しかけた。

真琴は黙って頷いた。

「子供ってのは大きくなればなる程、親が鬱陶しくなってくるもんだ。お前の兄貴だって楯突いてたんだからよ」

真琴は大葉の話に驚きを覚えた。

「誰が言おうと他人が押し付けるなんて酷いもんだ。だけどな、結果を見りゃ分かるが歯向かって何もねえ。押しつ
ぶされるだけだ。聞いたふりしてりゃいいんだ」

「ふりですか」

「従ってる分には、誰も文句は言わねえよ。演技か本気かは本人以外知らねえんだからよ」

真琴は大葉の言葉に唖り、鞆を見つめた。鞆のポケットに入ったCDが見えていた。

「駅に行きたいんですが、いいですか」

「家に戻るんじゃないのか」

「上町に用がありまして」

「思いつきか、ちゃんとスケジュール組めよ」

「すみません」

「謝る必要はねえよ。こちとら、寄り道程度の手間だ」大葉は車を止め、カーナビゲーションの液晶を突いた。画面が
切り替わり、目的地の入力画面に入った。指で付いて場所を指定した。

真琴は大葉と液晶を交互に見た。大葉は手際よく入力し、液晶には的確に駅名と住所が映っていた。一瞬で調べ

終わるのに驚きを覚えた。分厚い地図を調べず、的確に場所を見つけ出すのが不思議だった。

大葉は駅名のリストから一番上を突いた。

『これより案内を開始します』スピーカーから音声が出た。

大葉はアクセルを踏んだ。車は道路に入った。他に車はなかった。

「本当にすごいですね」真琴は液晶の画面を見ていた。画面内では車の動きに合わせて地図がスクロールしていた。

「GPSだ。衛星からデータを受信する仕組みらしい。四六時中色んな奴がアクセスして、よくパンクしねえよな」

「パンクしたら皆困りますよ」

「だよな」大葉は笑った。「夏休みはエンジョイしてるか」

真琴の顔が曇った。「宿題なんですけど、勉強会でやろうって話になったのですが場所がなくて困ってるんです」

「場所なら探せばあるだろ。役場に行けば公民館使わせてくれるんじゃないか」

「申請しても今すぐ使えません」

「夏になれば、爺共が毎日貸し切って囲碁やってるからな」

「ええ」

「なら、俺んち使えや。奥ん所の母屋が開きっぱなしで持て余してるからな。いくら騒いでも文句は言われねえから大丈夫だ。問題は遠い所だかな」

「いいんですか、乗り込みますよ」

「村の連中だってそんなもんだろ、何だったら今すぐでもいいんだ」

「冗談抜きで行きますよ」

「どんと来い。静かなのは好きじゃねえんだ」大葉は笑った。

車は自然の多い区域から4階建ての白を基調とした建物の並ぶ区域に入った。大通りを走っていき、広場のある駅前のロータリーに着いた。

『間もなく、目的地です』カーナビゲーションの無機質な声が響いた。

大葉は車を路肩に止め、周辺を見回した。普段見える2階建ての住居の代わりに商業ビルが立ち並んでいた。建物は平坦で涼しさを与える日陰がなく、暑さを更に煽り立てていた。遠くに山が見えていた。路線に列車の姿はなかった。

「前もですが、ありがとうございます」

「気にするな、上町行ったら土産でも頼むぜ」

「土産って、何も思いつきませんが」

大葉は笑いだした。「いちいち真に受けんなって」真琴の肩を叩いた。

真琴は頭を下げた。「ありがとうございました」真琴は急いで車のドアを開けて席を降りた。上着のポケットからCDが助手席に落ちたが、気づく間もなくドアを閉めた。

大葉は真琴に手を振った。

真琴は駅に向かって走っていった。

大葉は真琴を見送り、周辺を見回した。バス停のベンチに座っている男が大葉を睨んでいた。

「ボランティアにしては万全だな」大葉は助手席に目をやった。白いCDのケースが落ちていた。

「俺、こんなCD持ってたっけか」大葉はCDを手に取り確認した。何も書いていなかった。何が入っているのか確認するべく、カーナビゲーションの隣にあるCDのイジェクトボタンを押した。液晶が真横に傾き、奥にあるCDのトレイが開いた。CDのケースを開け、中身をトレイに乗せて軽く押した。トレイが奥に入り、液晶部分がせり上がった。周辺を見回して安全を確認し、車のアクセルを踏んだ。

車は道路に合流して加速し、駅前から去っていった。

真琴は改札機に小銭を入れ、切符を買って自動改札機に通した。改札機は乗車カードによる認証機能が付いていたが、真琴は持っていなかった為に切符を通す羽目になった。時刻表と構内に立てかけてある時計とを見比べた。現在時刻から20分程度で来ると分かった。上町行きホームに向かった。人は誰もいなかった。

村から出入りする手段は電車と自動車の2つがあるが、双方共に人の出入りは少ない。荷物を輸送するか、盆や正月で出入りしない限り村に来る意味はない。

真琴は延々とホームから見える景色を見つめていた。普段電車に乗らない真琴にとって、ホームから見える景色は望遠鏡で見る土地と同じ位に珍しかった。

15分程経過した。電車のアナウンスが流れた。

真琴はベンチから立ち上がった。銀色の電車が来た。ホームで停止し、ドアが開いた。誰一人として降りてこなかった。

真琴は電車に乗った。冷房が効いていたが、大葉の軽トラックの途中ではなかった。空いているベンチに座った。ドアが閉まり、アナウンスが流れて電車が動き出した。

真琴は窓から見える景色を見ていた。駅を離れ、海しかない景色が後ろへと動いていた。

電車は山を越えるべく、トンネルに入った。景色は黒になり、連続して映る白い電灯だけが電車に入っていた。

暫くしてトンネルを抜けた。山を越えた先は雪景色でもビルの集合体もない海だった。間もなく海を離れ、コンクリートの家が並ぶ景色に変わった。遠くには商業ビルが無数に建っているのが見えた。

目的地の駅を告げるアナウンスが、川を渡った段階で流れた。電車は徐々に減速し、駅のホームで止まった。ホーム上に人はまばらながら存在していた。ドアが開いた。

真琴は電車から降り、改札口前に立てかけてある地図を見た。一度行った場所であれば、周辺の状況から記憶を引き出すのは容易に出来る。改札口の上にある案内板を見て記憶と重ねた。正解だと判断すると改札機に切符を通した。改札機は切符を飲み込んだ。

真琴は駅を出た。

駅前の光景は幾多ものビルが集まり、壁となっていた。白い壁と看板が光を弾き、アスファルトの地面に熱を与えていた。セミの鳴き声は村より薄く、うるささに慣れていた真琴に違和感を与えた。記憶の中にある光景と異なっているのに気づき、近くにあるコンビニエンスストアに入った。立ち入ると同時に電子音が鳴り響いた。

「いらっしゃいませ」店員の声が響いた。

真琴は本棚に向かい、手帳サイズの地図を1冊手に取りレジに向かった。何の迷いもなかった。

店員は地図をバーコードスキャナーで読み込んだ。液晶に値段が映った。

真琴は液晶画面に驚いた。今まで目にしたレジといえば、計算機の表示窓が店の看板状の窓に映るタイプしかなかった。

真琴は冷静を装い、財布から小銭を出して支払った。事実であるが者知らずな田舎者と罵られるのではないのか

と恐れた。

店員は小銭を受け取り、地図の表紙にテープを貼って釣りとレシートを出した。

真琴は釣りと地図を受け取って出て、振り返った。窓を通して清潔感のある店内が見えた。田舎の雑貨店は地震が起きれば崩れる程に脆かった。

真琴は駅前のロータリーに止まっているバスを確認した。先にはアーケードのある交差点があり、多くの人が行き交っていた。

真琴はバスの行き先を確認してから、バスに乗った。座席が埋まる程度の乗客がいた。

暫くするとバスの昇降口が閉まり、バスが発車するアナウンスと共に、街の奥へと動き出した。駅を離れてもビルと住居だらけの景色が流れていた。

20分程乗っていた。前に置いてある液晶に朝日中学校の文字が見えた。『次は朝日中学校前です』アナウンスが流れた。真琴は降車ボタンを押した。軽快な電子音が響き渡った。

バスは市街地の奥へ奥へと進み、交差点の前にあるバス停で止まった。真琴は運転席に向かい、隣に置いてある料金箱に小銭を入れて降りた。制服を着た少女も立ち上がり、バスを降りた。バスは走り去った。

少女は交差点を歩いていった。

真琴は少女の姿と、映像で見た少女の姿を脳内で重ねようとした。映像の中の少女と制服の構成が似ていたが、思い出した映像が曖昧でぶれていた。

郊外とはいえ、団地が立ち並んでいた。前に来た場所なのか、別の場所と間違えているのか分からなくなってきた。

次第に、まばらに生徒達が行き交う姿が見えてきた。春休みに入っている為、学校に来る生徒は部活動位しか用がなかった。

学校の前に来た。構造自体は真琴が通う学校と同じだったが、壁が高野豆腐の印象だった村の学校と異なり、袋から出したアイスキャンディーの白さだった。

校門前に向かい、柱を見た。茶色のブロックに『朝日中学校』と書いてある銅板が埋め込んであった。

真琴は校門を行き交う生徒達を見つめていた。男子は上着を崩す形で着込んでいて、女子はスカートの丈が腿の上側が見える程に上げていた。村の学校にいる生徒と対症的だった。

真琴はすれ違う生徒達を見て、声をかけようか悩んだ。平川が如何わしい行為をしていたのなら噂になっていて、何かしらの形で耳にしているかと予想していた。

大人が中学生に声をかければ即座に交番か警察署で説教を聞く羽目になる。真琴は中学生なので何も問題はないが、他人は愚か他校の生徒に何もイベントもないのに声をかけるというのは相当な勇気がいた。知り合いもいないので、自分の名前が学校名を上げて知らぬ存ぜぬで終わるし、下手をすれば絡んで大人と同じ状態になる可能性もある。

真琴は大きく息を吸い、次に生徒が来たら話をしようとして心に言い聞かせた。直に如何わしい話があるので噂を聞きたいと言って通じるのか、新聞部を名乗ろうかと頭の中でシミュレーションをしていた。

校門の奥にある校舎から人影が見えた。自分は何も間違っていないと何度も言い聞かせた。人影が校門に出てきた。

「あの」真琴は話しかけようとして人影の姿を確認した。子供の生徒ではなく、大人の教師だった。恰幅がよく、上着のジャージを着崩していた。

「用でもあるのか」教師は真琴の方を向いた。

真琴はたじろいだ。教師にかつて在籍していた生徒が中年の男と遊んでいたという話は出来ない。

「いえ」真琴は引き下がった。興味本位で向かう必要はなかったと半ば後悔した。

「うちの学校で見かけない顔だな。何で校門にいるんだ」教師は真琴の胸ぐらを掴み、睨んだ。

真琴は教師の目を見て、父親と同じ型の人物だと確信した。強権で相手を叩き潰すのを、法に則った正当な措置だと勘違いしている輩だ。「てめえは何者だ、時間をかけて尋問してやる」

真琴は教師から目をそらした。自分が正しいと確信している輩には、何を言っても無駄なのを知っていた。

「ん、山下君じゃない」遠くから聞き覚えのある声がした。

真琴は声が出た方を見た。井崎が教師の元に駆け寄ってきた。

「あ、井崎さん」教師は思わず手を離した。男は雄であればある程、優秀な女の体内に精を放つのを認めて貰おうとする。自分は格上だ、俺の体と胤を受け入れろ、認識しろという感情が動く。教師は雄となった男の典型だった。

井崎は真琴の元に来るなり、教師を無視して真琴の方を向いた。

「そうだ、そうだよね」井崎は真琴に気さくに話しかけた。

真琴は学校で指導している井崎と異なる表情と口調に驚いた。

「態々来るなんて、私か学校に用でもあるの」

「あの、井崎さん。打ち合わせですけど」教師は口を挟んだ。

「後でいいわ」井崎は簡単に教師の言葉を切った。

教師は黙った。

「用事といいますか、平川さんって前の学校で何で印象があったのかなと」真琴は曖昧に言った。明確に如何わしい映像に出ていたから真偽を調べに来たとは、直に言えない。

井崎は一瞬、眉をひそめた。平川に興味を持つ生徒がいた一方で、彼女の過去に触れようとする人がいるのに戸惑いがあった。

「ふさぎ込んでるから」井崎は真琴に尋ねた。

真琴は首を振った。「矢鱈に文句言ってますし、歌も上手いから何でだろうと」

井崎は真琴の言葉に唖った。他の生徒達に比べ、達観しているのに疑問を持っている。この手の人は多少ながら話をしないと納得しない。「そうね、話をしましょう」

「はい」真琴は相槌を売った。

「おい、今は俺との打ち合わせがあるんだ。話なら後でやれ」教師は鼻息を荒くして二人の間に割って入った。ヴァンダリズムに染まった雄は、いかなる手段を講じてでも美しい彫刻を自分専用の便器に仕上げたいのだ。「警察に突き出すぞ」

「何の非もない子供を突き出す気」井崎は教師に強く言った。

教師は引いた。

「行きましょう」井崎は真琴の手を取った。

「打ち合わせはいいんですか」

「無理やり連れ込むなんて、セクハラ以前の問題だから無視よ」井崎は真琴を引っ張った。

教師は真琴の肩を掴んだ。今止めて真琴を排除しなければ、女の肌と中の感触を得る機会を失う。快樂を至上とする雄にとって、自分に快樂を捧げる行為が全ての雌から侮辱を受ける行為はあってはならない。

「俺の打ち合わせをどうしてくれるんだ。ガキのお前が割り入る用件なんざねえ」

「永遠にお断わりよ」井崎は平然と吐き捨てた。教師の意図を全て察していた。

教師は井崎の言葉により、動けなかった。

「さあ、行きましょう」井崎は学校から去っていった。

真琴は井崎の後をついていった。

「何処に行くんですか」

「適当な所で昼にするわ。いい場所ないって、分かる訳ないか」

「学校の近くで店やってる人が、身内にいます」

「本当に」

「はい」真琴は頷いた。

「案内して」

「分かりました」真琴は学校に至る大通りを曲がった。

井崎は後をついていった。

車が1台通る程度の隙間の通りを歩いていった。コンクリートの建物が密集していて、庭に植えてある木がある程度しか自然がなかったが、セミの音が遠くから多重に響き、アスファルトから陽炎が揺らいでいた。

暫くして花壇が並ぶ店に着いた。見花が幾つも咲いていて、店の前が埋まっていた。庭には白いテーブルと椅子が置いてあった。

井崎は店の外観を眺めた。花や観葉植物が詰まって置いてあった。「花屋さんのの」

「いえ」真琴は入り口に向かい、両引き戸を開けた。備え付けてある鈴が乾いた音を立てた。

井崎も後に続いた。

木材を基調としたスペースで、茶色と植物の緑が絡み合っただジャングルの中にある店という印象を演出していた。壁に立てかけてあるテレビモニターから映画が流れていた。音声は流れず、代わりに重厚なクラシック音楽が流れていた。カウンターや席には花瓶があり、花が刺さっていた。朝日学校の生徒が席に座り話し込んでいた。カウンターの脇には茶色の本棚があった。中には本が詰まっていた。

井崎は天井を見た。シーリングファンが干渉しない形で、鳶を模した紐が絡みついていた。

天井の空調からかかる冷たい空気と、涼しさを演出した室内により別の空間に来た印象を与えた。

「変わった喫茶店ね、知らなかったわ」

カウンター席の先には辰彦と、同世代の女性が作業をしていた。二人共揃った前掛けをしていた。

辰彦は入り口から鳴り響く鈴の音に気づき、振り返った。「いらっしやいませ」

真琴は辰彦の方を向いた。互いの視線が合った。真琴は目をそらし、カウンター席に向かった。

辰彦はわずかに笑みを浮かべ、女性の方を向いた。「真琴が来た。ケーキと茶を用意してくれ」

女性は驚いた。「真琴って貴方の」

辰彦は頷いた。女性は奥に向かった。

井崎は真琴の隣の席に着いた。「テーブル席の方がいいんじゃない」

真琴は苦笑いをした。「眩しくて苦手です」

井崎はテーブル席に目をやった。窓から入る光がテーブル席を照らしていた。

「随分拘るのね」井崎は立てかけてあるメニューを手に取り、開いてみた。コーヒーやジュース等のソフトドリンクから、チキンステーキをはじめとする重めのメニューまで揃っていた。ライスはなく、代わりにパンが充実していた。

メニューから目をそらし、本棚に目をやった。中に入っている本は民俗学に関する表題が多く、合間に料理や近辺のガイドが挟まっていた。

女性は奥から戻ってきた。手に乗っている盆の上にはハーブティの入った湯呑、シフォンケーキを乗せていた。辰彦は冷水をタンブラーに入れ、盆に乗せてカウンター席に向かった。真琴の席の前に来た。真琴の元に湯呑とシフォンケーキを置いた。「真琴、遅れたが誕生日の祝いだ」

真琴は辰彦の言葉にため息を付いた。恥ずかしさから弟としてではなく、一介の客として見て欲しかった。「あ、ありがとう」

井崎は辰彦の方を見た。辰彦は井崎の元にタンブラーを置いた。「あの、山下君の知り合いですか」

「兄です」

井崎は辰彦の返事に驚き、真琴の元にあるシフォンケーキを見た。「村の人ですか。なら誕生日も近いんじゃないですか」

辰彦の顔が僅かに曇った。「何で、分かるんだ」

「赴任して生徒達の誕生日を見る機会がありまして。近い人が多いのももしかしてと思いました」

辰彦は笑みを浮かべた。「その通りだ」

「赴任となれば、村で何かしらの仕事をしていると」

「教師をしています。山下君は教え子です」

「では、学校の帰りですか」

「ええ」

真琴はシフォンケーキに手を付けていた。

「あの」井崎は辰彦の方を向いた。

辰彦は井崎の方を向いた。「何か」

「注文あるんだけど、いい」井崎は辰彦に尋ねた。

「忘れてました。どうぞ」辰彦は丁寧と言った。井崎は身内ではない、赤の他人だ。

「クラブサンドとコーヒーのセットを一つ。コーヒーは一緒に出して」

辰彦は伝票を取り出し、書き留めた。

「自分はハヤシライスをお願いします」真琴はついでに言った。

「分かりました」辰彦は奥に向かっていった。

「すみません。平川さんですが合唱上手いですよね」真琴は井崎に話しかけた。平川がビデオに出ていたのか否化を知る為に探りを入れてののだが、直に聞けば失礼になるし、ビデオを見たのかと言う問題にそれていく。外堀を埋めていくか、諦めるかの分水嶺として尋ねてみた。

「井崎さんは合唱部だったと言っていましたか、本当なんですか」

「何処で調べたんだか、変な所に執着するわよね」井崎はモニタに目を向けた。狭い通路で大人が逃げる子供を追いかけていた。「ええ、本当よ」

「何で転校してきたんですか。都会にいる方が楽じゃないんですか」

真琴はケーキを食べ始めた。甘みと濡れた食感が程よく混じっていた。

井崎はわずかに俯いた。転校した理由を一介の生徒に話すべきか悩んだ。話せば平崎に同情してしまい、遠慮してしまう。下手をすれば事情を話してしまい、ますます彼女を孤独に追い込むかも知れない。

鈴の乾いた音が鳴り響いた。

井崎と真琴は出入り口を見た。中年の男と朝日中学校の女子生徒が入ってきた。女子生徒のスカートの丈は腿が丸々見える程だった。2人はテーブル席に座り、話を始めた。

真琴は映像で交わっていた中年の男と少女を脳裏に浮かべた。一瞬、行為に及ぶ前の打ち合わせかと頭によぎった。

「いらっしゃいませ」カウンター席で調理をしている辰彦は声をかけた。

「都会の学校って、皆入ってきた生徒みたいな格好してるんですか」真琴は井崎に尋ねた。

「稀よ、だけどよくいるわ」井崎は吐き捨てた。

料理の盛り付けが終わった。辰彦と女性は料理を乗せた盆を持ち、井崎と真琴の元に向かった。

「こちらです」女性は井崎の元にクラブサンドとコーヒーを置いた。辰彦は真琴の元にハヤシライス置き、最後に伝票を置いた。

「客の注文を」辰彦は女性に声をかけた。

女性は頷き、中年の男と女子生徒が座っている席に向かった。

井崎は皿に乗っているおしぼりに手を取り、手を拭いてクラブサンドを手にとって口に入れた。挟まっているトマトの酸味とレタスの食感がパンの甘みに絶妙な味を引き立てていた。

「気になるか、ああいうの」辰彦は真琴に声をかけた。「学校と駅が近いからな、話し合いつてのはよくあるんだ」

「話し合いつて何ですか」

「学校で教わってないのか、援助交際って奴だよ」

辰彦の話に、井崎は眉を動かした。

「中年のおっさんと中学生がナニするって奴だ。今や下火になったが、店を開けたばかりの時は結構いた。男つてのは自分がいつまでも若いと認識してるらしく、学生時代の気分が抜けれないから若い女とやりたがる」

「都会の中学校って、皆援助交際の話をするんですか」

「いや」辰彦は首を振った。「殆ど親と子供だ。中学の頃って進路で揉めるのが多くてな、9割方三者面談の調整だ。親と子供で打ち合わせとかないと、話がややこしくなるからな」

「はあ」

「援助交際の話であって欲しかったか」

真琴は渋い表情をし、スプーンを手にとってハヤシライスに手を付けた。

「村でも似たようなのをやってる、ある意味達が悪いがな」

井崎は辰彦の言葉を聞き、手を止めた。

女性が戻ってきた。「辰、注文」辰彦に伝票を渡した。

辰彦は伝票を受け取り、踵を返した。

井崎は2人のやり取りに眉をひそめた。辰彦と女性のそっけなさが、店員と店長の関係とは考えにくかった。

「失礼ですが、お二方の関係は」

辰彦は足を止めた。

「真琴は分かるか」辰彦は真琴の方を向いた。真琴は眉をひそめていた。

「結婚したんだ、来年には子供も生まれる」

真琴は辰彦の言葉に驚き、女性を見た。女性は真琴に頭を下げた。

「何で知らせなかったんですか」

「知らせても来ないからな。村の規則って奴だ」

真琴は渋い表情をした。「出たら戻れないってのは、村の規則なの。墓参りにも来ないのも、規則が理由なの」

辰彦は眉を潜めた。正直に返答をして納得するのか。

「盆の時、墓参りで辰がいないから墓守がうさかったんだ。俺は次男だから出来ない、何としても戻せって喧嘩になって。今年もまた喧嘩になるのかなって気になってるさ」

「墓守は長男以外になれないからな。戻ろうにももう無理だから、墓は廃れるしかないな」辰彦はありのままに答えた。

真琴に嘘やオブラートに包んだ話しかしてても理解出来ないかと判断した。

真琴は、辰彦の言葉に怒りを覚えた。「戻れないって何だよ」

「事実だ。お前も村の規則を分かっているはずだ。破れば戻ろうにも戻れない。いくらお前や村が辛い思いをしても、規則を消さない限りは二度と戻れない」

「戻れないって、電車に乗って戻ればすぐでしょ」

「監視がいるのよ」井崎は淡々と言い、タンブラーの水を飲んだ。

辰彦は頷いた。「俺一人なら良いが、もう一人じゃないからな。周りに迷惑がかかる以上動けないんだ」辰彦は女性に目をやった。女性は申し訳なげな表情をした。

井崎はメニューを閉じた。

「本当に、墓は廃れていくの」真琴は不安げに言った。

「先なんて分からない。規則を破って墓守になるか、従って廃れていくかはお前次第だ」

「自分次第」

「そろそろ進路決める頃だろ。もう決まってるんじゃないのか」

真琴は眉を潜めた。「決まってないよ」

「いや、もう決まってる。言ったら周りが何と思うか。今の学力で受験に失敗したらって、今の状況と昔の結果を照らし合わせてこの足踏んでただけだ。先を考えなきゃいいのにな」

真琴は辰彦の話に唸った。漁を拒否した時、父親がどういふ反応をするかより合唱を気にかけていた。辰彦の言う通り、案外先を気にしなければすぐに動けるのだ。

「まあ何だ、血の繋がってる子供が出来るとのは特別な感覚だよ。自分が今何処にいるのかしか考えてなかったからな、誰の血が繋がってるかって考えが斬新に見える」

「繋がりますか」

「別に、何処から湧いて出てくるって意味じゃないぞ」

真琴は苦笑いをした。
「子供はどんな手段でも、やれば出来るわ。でも愛がなければ産めないし、育てもしないわ」井崎は諦め気味の口調で言い、最後のクラブサンドを口に入れてコーヒーを啜った。
辰彦はカウンターの崎にある厨房に引き返した。女性も後に続いた。
真琴はハヤシライスを食べていた。デミグラスソースの酸味と甘みが口の中で広がった。具は柔らかく、噛めばすぐ溶ける程だった。家では味わえない味だった。
淡々と食べ進み、2人は食事を終えた。真琴は平川に関する話を忘れていた。
「ごちそうさまでした」真琴は伝票を取ろうとした。
井崎は伝票を手を取った。「奢るわ」
「いいんですか」
「たかが一食でも中学生には大金でしょ」
井崎は自分の伝票を取り、出入り口にあるレジに向かった。真琴は後をついていった。
辰彦は女性に目配せをした。既に料理は出来ていた。
女性は頷き、料理を本に乗せる作業を引き継いだ。
辰彦はレジに向かった。「ありがとうございます」
井崎は手に持っている伝票を差し出した。「会計は同じでお願いします」
辰彦は伝票を見て、レジスタを打ち込んだ。備え付けのウィンドウに金額が映った。
井崎は鞆から財布を取り出し、札を2枚取り出した。
辰彦は札を受け取り、レジスタに打ち込んだ。ウィンドウに釣りの金額が映り、同額の貨幣を取り出して井崎に差し出した。「以上です」
「ありがとうございます」井崎は釣りを財布に入れ、財布を鞆に入れた。
「思い出しましたが、大葉さんが元気してるかって言ってました」
「大葉か、随分懐かしいな」
「誰ですか」井崎は尋ねた。
「昔、色々あってな。やらかしたというかまあ、いい奴なんだが」辰彦は唸った。「元気してるというか、家族作ってサテン切り盛りしてるって言ってくれ。大葉の調子はどうなのか」
「クロス張りの仕事してます」
「村から出ないでか」
「ええ」
辰彦の表情が曇った。自分と同じ真似をしたのだから、只で済むはずがない。
井崎は辰彦の表情の変化に、違和感を覚えた。話に出てくる大葉と、今いる店の人は村に何かしらの損害を出したのだと判断した。
「村から出たって話は聞いたか」
「余り聞かないな。外から通販で買い物してるって前に聞いたけど」
「うまくやってるか」辰彦はレジの隣にあるカウンターに向かい、置いてあるワインの瓶を取って真琴の元に来た。「大葉に持って行ってくれ」
真琴は瓶のラベルを見た。筆記体の英語が書き込んでいて、読めなかった。
井崎はラベルを見て驚いた。「相当な代物よ、持って行っていいの」
「気にするな。置いていても腐るだけだからな。ついでに言えばほんの罪滅ぼしみたいなものだ」
「罪滅ぼし」真琴はオウム返しに言った。
辰彦は真琴の肩を叩いた。「個人的な話だ、気にすんな」
井崎は黙ってドアに手をかけて開けた。鈴の音が鳴り響いた。店を出た。真琴も後を追った。
女性は中年の男と中学生の女子が座っているテーブルに頼んだ料理を乗せ、踵を返して厨房に戻った。
中年の男は、中学生の女子の手元にある料理を見て、笑みを浮かべた。「うまそうだな、俺も同じのを頼むか」
女子は冷やかな表情で、中年の男の目をそむけた。
井崎と真琴は外に出た。空調の効いた屋内から出た瞬間、暑苦しい空気が体全体に襲い掛かってきた。2人は駅まで歩き出した。
「知り合いがやっているなんてね。しかも気さくでいい人ね」
「はい。明日から練習ですよ」
「そうなるわ。でも大して時間は食わないわ。余り人が来ないし、宿題もしないといけない。夏休みって暇そうに見えるけど、実際には皆大変なのよ」井崎は苦笑いをした。
真琴は頷いた。自分が漁の手伝いから外れなければ、ほぼ遊ぶという考えは割って入らなかった。人は織から出ると、自ら檻に戻ろうとする。枷をはめれば目標が出来るからだ。何でも出来る状況ほど、何も出来ない。「ええ、そうですね」
駅前に着いた。行きに見かけた光景と同じだった。
「これから帰るんですか」真琴は井崎に尋ねた。
「いいえ、打ち合わせがあるから逆方向になるわ」井崎は鞆からカード入れを取り出した。
「ありがとうございました」真琴は頭を下げた。
「いいえ、私も貴重な経験をしたわ。綺麗な店に入るのって勇気がいるのよ。また明日」井崎は笑みを浮かべた。改札口に向かっていった。カードをかざした。改札口のゲートが開いた。奥へと進んでいった。
真琴は井崎の笑みに照れを覚えた。学校での陰しい表情と異なる言動に、教師としてではなく姉としての親近感があった。一緒にいたいと心の奥底で感じていた。周囲を見回して電話ボックスを見つけ、中に入ると財布を取り出してテレホンカードを入れた。
受話器から平坦な音が鳴っていた。
真琴はダイヤルを押して電話をかけた。
受話器から呼出音が鳴った。暫くして音が途絶えた。
『もしもし、井崎ですが』中年の女性の声が出た。
『もしもし、山下 真琴と言いますが照美さんはいますか』
『はい』直後に保留の音楽が鳴った。
暫く経った。保留音が切れた。『もしもし、山下君。用でもあるの』照美の軽快な声が聞こえた。
『明日以降の勉強会だけど』
『勉強会、場所あったの』

「大葉さんが、自分の家が空いてるから大丈夫だって言った」
『大葉、ああ大工の』照美の納得した声が聞こえた。大葉は出先で子供の面倒をよく見ていた為、人の良いお兄さんとして有名だ。但し年寄りには評判が悪く、接触するなど不審者同然に扱う者もいた。『忙しそうだけど、空いてるの』
「月曜から暫く休みだって言った。勝手に来てもいいって」
『本当に』
「うん」

暫く沈黙が走った。『分かった。明日学校に行ったら皆に話してみるわ』

電話が切れた。

真琴は券売機に向かって切符を買い、改札口に向かって通した。ゲートが開き、村に行く電車のホームに来た。自分以外誰もいなかった。不便な村に向かう酔狂な人間はいなかった。

真琴はベンチに腰掛けた。平川が如何わしいビデオに出ていた少女だったのか、真偽はわからないままだった。前の学校で何があったのかさえも分からない。分かったのは学校で如何わしい行為をしている人間がいるらしいという話だった。本人に直接聞く以外にないのか。

電車が来た。窓からまばらな人が見えた。ホームで止まり、ドアが開いた。殆ど人が降りた。

真琴は人が降りきった段階で電車に乗った。座席に空きがあった。すぐに座席に座った。

電車が動き出した。行きと逆に景色が動いた。

電車の動きに眠気を覚え、次第に意識が遠のいていった。

トンネルを通り抜けると建物の集合体から木の集合体に景色が変わった。

アナウンスが流れた。真琴は聞き慣れた駅の名前に目を覚ました。電車は駅に着いた。ドアが開いた。

真琴は立ち上がり、電車を降りた。

駅を出てバスターミナルに向かった。人気はなく、バスも止まっていなかった。バス停に向かい、ベンチに腰掛けた。暫くしてバスが来た。

真琴は、バスの出入口に映っている行き先を確認してから乗った。

バスが動き出し、駅から去っていった。

真琴は景色を眺めていた。次第に海が見えた。

アナウンスが流れた。停車ボタンを押した。ブザー音と共にアナウンスが流れた。

バスはバス停に止まった。真琴はバスを降り、港に向かった。まだ日が沈んでいないので、出歩く余裕はあった。波が岸壁に打ち付ける音だけが全体に響いていた。船は漁の為全て出港していて、完全に消滅した漁港を作り上げていた。

真琴は周辺を見回し、平川の姿を探した。岸壁の隅で立ちすくんでいる平川の姿があった。平川の元へ駆け出した。

平川は真琴に気づき、振り向いた。

「平川さん、来てたんだ」

「誰もいないから」

真琴は海の方を向いた。丸い水平線を堺に暮れ始めた空と、色を移した海があった。船は一隻も見えなかった。

「歌の練習をしに来たの」

平川は頷いた。「他に何かあるの」

「海を見ると落ち着くかなって」

「かもね。ずっと上町にいたから海なんて殆ど見なかったもの」

真琴は界面からの反射する光を紛らわせる為、眉間にシワを寄せた。例の件について尋ねようと決めた。「前に合唱部にいたって井崎さんが言ってたけど、本当なの」

「前の学校ではね。今いる学校はないから帰宅部になってるわ」

「上町の学校で、その援助交際っていうのかな。そういうのがあるって聞いたんだけど」

平川は表情が一瞬、曇った。

真琴は表情の曇りに違和感を覚えたが、何故違和感があったのか分からなかった。

「中学生にでもなれば、男や女に興味を持つのは当然でしょ。互いに惹かれ合えばセックスは外せない。相手としたかどうかの問題でしょ。個人レベルの話だから他人が介入する余地はないわ」

「そうなんだけど」

「興味を持ってやる。大した問題でもない。する人はするし、しない人はしない。貴方はもうしたの」

真琴は平川の質問にたじろいだ。自分はまだ女の味を知らず、知ろうにも先には村や進路の問題がのしかかってくる。他人を意識するどころか、抱く余裕もない。

平川は海を背にした。「してる人はしてる。いつか誰もが経験するもの。早いか遅いか、金を得るか愛を得るかの違いだけで差別するいわれはないわ」

「ごめん」真琴は頭を下げた。理由は分からないが、説教を受けている気分になった。

「いいわ」平川は海の方を向き、歌を歌い始めた。真琴が不憫に感じ、かける言葉もなかった。

真琴は一生懸命に歌う平川の姿を見つめていた。余計な詮索をしてしまったのではないかと気づいた。早かれ遅かれ誰もが経験するなら、年を経れば当たり前になっていくなら、知った段階で珍しく、傷をつける武器になるのが将来に持ち越す意味はない。どんな刃物も使わなければ錆付き、薄い金属の板に成り果てる。

「帰るね、また明日」真琴は平川に声をかけ、バス停に戻った。

平川は歌を中断し、真琴の方を向いた。バス停に向かう真琴の後ろ姿があった。

「また明日」平川はつぶやいた。真琴の姿が港から消えるまで、見つめていた。

バス停に来た真琴はベンチに腰掛けた。20分程待った時、バスが来た。真琴はバスに乗った。バスは走り去った。

真琴は家に戻った。日の光は薄まり、景色はコントラストが濃い絵画となっていた。真琴は家に戻り、自分の部屋に向かおうと居間を通らず階段に向かった。

「戻ってたの」母親の声が聞こえた。

真琴は立ち止まり、声がした方を向いた。母親が立っていた。

「真琴、父さんが明日手伝って欲しいって言ってたわよ」

「もういいって言ってたのに」

「どうしてもって言った。合唱はいつ終わるのかって聞いてたわ」

「午前中で終わるよ。終わったら大葉さんの家で勉強会をする」

母親は『大葉』の言葉に不快さを覚えた。

「大葉さんの」

「駄目なの」
「変なのを吹き込まれてないでしょうね」
「変って」
「いつまでも村に居座って。追い出せばいいのに囲い込むなんてね」
真琴は眉をひそめた。大葉は村の端に住んでいるのに、囲い込む意味が理解出来なかった。
「父さんがね、明日漁があるから付き合いなさいって」
真琴は渋い表情をした。突き放したはずなのに漁を手伝えとは、都合のいい話ではないのか。
「どうしても忙しいんだって。聞かないと分かってるでしょ」
「合唱の練習は」
「合唱なんて、一銭の価値もないのにやる必要ないわ。漁を手伝えば将来の役に立つじゃない」
「宿題は。合唱の練習が終わったら勉強会をやるって言ってるんだ」
「最後にやりなさい。私や父さんだって最後にやってたわ。子供は休みの時は、親の手伝いをするって決まってるの」
真琴は項垂れた。明日やる予定を全て潰してくる。自分の経験から、決まっているからと突き放して子供を道具として使ってくる。反発すれば暴力か詭弁で畳み掛けてくる。力のない子供には何も出来ない。しかし、従ったままでは更なる命令が飛んでくる。命令は無限にある限り消えない。永遠に従うしか他になくなる。
「予定は消せないよ」真琴は言い切った。自分一人で組み立てた予定ではない、学校を含め他者との契約なのだ。破棄するには同意した人とまた契約しなおさねばならない。
「でも漁を手伝えば」母親が真琴を説得しにかかった。
父親が居間から出てきた。穏やかな海に海坊主が乱入してきた。「お前は今まで育てた父の恩を忘れていいのか」
真琴は何も言えなかった。『はい』か『いいえ』か以前に、好き好んで今いる家に生まれ育ったのではない。まして生まれた時に育てて下さいと懇願した試しはない。
父親は眉間にしわを寄せた。「おい、聞いているのか。答えろ」
真琴は答えなかった。
父親は真琴の首をつかんだ。血管の浮いた頑丈な腕が真琴の呼吸を阻み意識を薄めていく。
「使えないお前を使ってやって言ってるんだ」父親は投げつける形で柱に叩きつけた。
真琴は頭を打った。酸欠気味の頭にとどめを刺し、意識が朦朧として倒れこんだ。
父親は真琴の腹をサッカーボールを蹴る要領で蹴りだした。5巻が鈍っている真琴には痛みがある程度しか認識出来なかったが、体は異常を検知していた。蹴りを受ける度に口から粘り気のある液体を吐き出した。
「軟弱な奴だ、お前を女に育てた覚えはない。男なら村の、父親のやり方に黙って従え」父親の蹴りは強まった。真琴の体が揺らいた。
母親は黙って父親が真琴を蹴っている様を見ていた。村では育ててきた父親、環境に感謝の念を込めて従った。父親の代も、前の代も同じく規則に従って来たから今の地位や村の文化がある。否定すれば今まで築いてきた社会や文化が消滅する。いかなる手段を講じてでも守るのは力ある者の責務だ。
真琴の呼吸が細くなり、風が通る音が混じっていた。
父親は顔を赤くし、息を荒げていた。一仕事を終えた充実感があった。力ある者は弱者をいたぶる行為に快樂を見出していた。
「辰の二の舞にする気はない、体で叩き込んでやる」父親は居間に戻った。
母親は真琴に近づいた。真琴は意識を失い白目を剥いていた。呼吸が荒く手足の先が青くなり痙攣していた。
「子供や学校の約束なんてね、守らなくてもいいのよ。大事なのは村をどう維持するかだから、親の言いつけを守ればいいの」
母親は居間に去っていった。暫くして父親が水の入ったバケツを持って出てきた。まことにバケツの水をぶちまけた。
真琴は意識を取り戻した。同時に全身の痛みが復活し、悶え苦しんだ。
父親は冷徹な目で真琴を見ていた。辰彦は異を唱え、同期と共謀して村に損害を与えた卑怯者だ。育てた恩を忘れ自分に泥を塗った輩だ。真琴を辰彦と同じに育てる気はない。俺の、村に従い全てを担う者にするのだ。
真琴は喘ぎ続けた。理性が痛みから抜け出したくとも、体は異常を検知し続ける。無間地獄の中でもがき苦しみ続けた。
父親は真琴を持ち上げた。真琴の体重に匹敵する荷物を積み上げていた為に大した労力ではなかった。廊下を渡り家の奥へと連れて行った。

(第四話 完)